《 第 1 部 》 季節を問わず成体が見られるクモ

・アシダカグモ
・ヒラタグモ
・ネコハグモ
・アダンソンハエトリ
・オオヒメグモ
・オニグモ
・ユウレイグモ
・ジグモ
・キシノウエトタテグモ
・カニミジングモ
・ハナグモ
・ネコグモ
・イタチグモ
・ムナアカフクログモ
・メキリグモ
・ヤマジグモ
16 種

01

♀ Photo：池田

眼縁に白線がある
※腿節の黒く囲まれた白点は
コアシダカグモと共通

卵嚢を持つ♀ Photo：石田

♂ Photo：石田

アシダカグモ

足高蛛 *Heteropoda venatoria* (Linnè 1767)

アシダカグモ科

-- %

屋内徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 20 ～ 30 mm

♂ 約 10 ～ 25 mm

【観察ポイント】大変大きなクモで，関東以西の屋内に見られる。山間では屋内に侵入したコアシダカグモがアシダカグモと間違われる。両種の外見は似ているが，眼縁の白線の有無で識別することができる。オスの背甲の心臓形の斑紋は本種に特徴的。

【習性】昼間は物陰に潜んでいるが，夜間隠れ場所から出て脚を広げて静止し，近くに来る昆虫を捕える。【卵嚢】円盤状の卵嚢を抱えて守る。300 ～ 600 卵（最小 188 ～最多 900 卵）。

【生活】求愛・交尾時期は 9 月，翌年 6 月に産卵。静岡以西ではメスは 10 回の脱皮で 1 年間で成体となる個体がいる［関口］。産卵後にも脱皮する。雌雄とも寿命が長いため年中成体が見られる。飼育下でメス 13 年，平均 7 年，オス平均 5 年［萱嶋］。

【トピック】ゴキブリ・ハンターとして有名。月に 19 頭のゴキブリを補食した例がある。幼体もゴキブリを捕る［萱嶋］。学名の「venator」は狩人を意味し，分類学の父リンネが名づけた。

コアシダカグモ（成熟：夏）
Sinopoda forcipata (Karsch 1881)　**アシダカグモ科**

♀ 約　18 ～　25 mm　♂ 約　15 ～　20 mm

屋外に住み，夜間に捕食活動。徘徊性。アシダカグモ同様，カマドウマ，コオロギ，ガなどの昆虫を待ち伏せ捕食，基本的にじっとしていて動かない。クモバチ（ベッコウバチ）によく狩られている。【卵嚢】樹皮などに産卵し，おおいかぶさって守る。産卵期は 7 月。卵数や生育の記録は無し。【備考】地域による別種が報告されている。

＜♀ Photo：新井＞

アワセグモ（成熟：夏）
Selenops burusarius Karsch 1879　**アワセグモ科**

♀ 約　8 ～　12 mm　♂ 約　8 ～　12 mm

アシダカグモの幼体に似る。徘徊性。昼間は壁の隙間，柱の割れ目，樹皮下などに潜む。夜間に壁面や樹皮上で獲物を待つ。【生活史】7 ～ 8 月に成熟。長崎県では 8 月 21 日に産卵。黄色の 78 卵を簡単に糸で固定し，その外に紙状の保護膜を張る。8 月 29 日に第 1 回脱皮，9 月 2 日卵嚢内で動く［大利］。【備考】東京都内では 40 年以上記録がなかったが，近年，杉並区で採集された。岩手県からも記録がある［貞元］。

＜♀ Photo：新海＞

ヒトエグモ（成熟：夏）
Plator nipponicus (Kishida 1914)　**ヒトエグモ科**

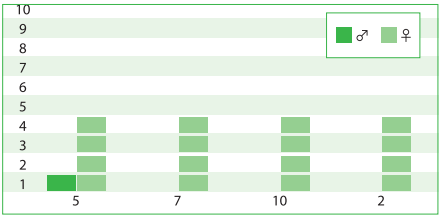
♀ 約　6 ～　8 mm　♂ 約　5 ～　8 mm

体が扁平で古い民家や寺院の屋内で発見される。屋外では大木の樹皮下に住む。徘徊性。昼間は壁の隙間，柱の割れ目，床の隙間等に潜んでいる。夜間隠れ場所から出て壁や畳を歩き回って小型の昆虫やクモ等を捕える。関西での発見が多い。【備考】アワセとヒトエは着物の袷（あわせ）と単衣（ひとえ）を意味する。ともに扁平なクモであることから岸田久吉が対にして名づけた。袷は単衣より厚い。＜♂ Photo：新海＞

02

♀ Photo：石田

住居内の卵嚢 Photo：池田



ヒラタグモ

扁平蜘蛛　*Uroctea compactilis* L.Koch 1878

ヒラタグモ科

90 %

放射状受信糸網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 8 ～ 12 mm

♂ 約 6 ～ 10 mm

【観察ポイント】形態独特で家に多く生息し識別しやすい。腹背の斑紋には変異があり，白色無紋の個体さえある。幼体と類似する種に屋内性のチリグモがある。

【習性】上下の膜で出来た白色円盤住居の間に入っている。【網性】住居表面は食べかす・ゴミ・脱皮殻で擬装される。住居の間から 10 ～ 30cm の受信糸を出している。最初は体を覆い隠すための上幕と，体を支えるためのわずかな拡がりを持つ下幕を作る。その後に放射状に受信糸を引き，下幕を拡くし，上幕を広く厚く整形していく。不都合がないかぎり，最初の住居網を捨てず，成長につれ，糸を張り添える〔中平〕。虫が受信糸に触れると，クモは住居からとびだし，腹部を持ち上げて第 4 脚で大量の糸を引出し，ラップして捕獲する。似たチリグモは篩板を持つが，ヒラタグモには篩板はない。【卵嚢】白色円盤状を 3 ～ 4 個，住居の中に作る。10 ～ 40 卵。産卵は 3 ～ 10 月の間に不定期に行うが、6 ～ 9 月が最も多い。

【トピック】ヒラタグモの円盤状住居は江戸時代に「壁銭（へきせん）」と呼ばれた。

チリグモ（成熟：春、夏）
Oecobius navus Blackwall 1859　**チリグモ科**

♀ 約　2 ～　3 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

屋内性。【網性】壁の隅や障子の桟などの隅に 5 ～ 10mm の小さなボロ網を張る。網の周囲には短い受信糸を引く。【産卵】4 ～ 9 月［宮下和］，橙色に赤味の濃い卵で［大利］，5 ～ 16 卵，一か月に 6 回産卵［中平］。【生活】雌雄が接触した後，オスは交尾用網を作成，網上に導かれたメスの腹面にもぐりこみ，交尾［稲葉］，通常メスの住居に侵入しメスに糸をかけ，動けなくなったメスに 1 秒間交尾，5 分間に 9 回交尾した［永井］。＜♀ Photo：安藤＞

ユカタヤマシログモ（成熟：夏）
Scytodes thoracica (Latreille 1802)　**ヤマシログモ科**

♀ 約　4 ～　7 mm　♂ 約　4 ～　7 mm

6 眼である。【網性】夜間屋内を徘徊。網を張らずに足先で探り，足に触れた虫やクモをめがけて口から左右ジグザグ状粘糸を吐き，獲物を取る。絶食に強く一年間絶食のまま生存した記録がある［白］。【生活】都内で 6 月 30 日に産卵された卵は 7 月 11 日に孵化，23℃・湿度 50 ～ 60% で飼育すると，オスは 350 日前後で成熟（短日で 6 回，長日で 7 回脱皮），メスは長日で 6 回脱皮［宮下和］。＜♀ Photo：池田＞

イトグモ（成熟：春）
Loxosceles rufescens (Dufour 1820)　**イトグモ科**

♀ 約　7 ～　10 mm　♂ 約　7 ～　10 mm

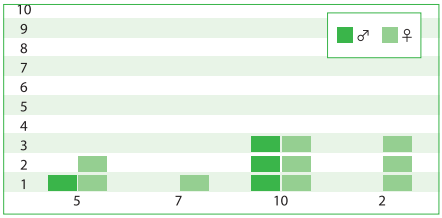
6 眼である。【網性】寺社や人家の物置の壁板の隙間などに棚網が古くなったようなボロ網を張るが，糸が薄く気付かないことが多い。ゴキブリの子供，蚊，蝿，他のクモなどを捕える［新海］。【生活】二度羽虫を与えただけで 2 年 4 ケ月生きた［福島］。成体になってから 3 ～ 4 年は生き，各年に産卵する。【備考】北米・南米には組織毒をもつドクイトグモが生息。日本のイトグモでは被害例が稀，最近，局部の壊死例が報告された［小松貴］。＜♀ Photo：新海＞

03

♀ Photo：安藤

近縁種には腹背に特徴的な紋様がある

♂ Photo：安藤



ネコハグモ

猫葉蛛　*Dictyna felis* Bös.& Str. 1906

ハグモ科

40 %

ボロ網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 4 ～ 5 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】人家性であるが野外にも造網する。ハグモ類は小形で斑紋や色彩の似た種類が多く，識別には生殖器を調べるなどの注意が必要である。

【習性】建物の窓枠の隅にボロ網を張って網の下にいる。葉上の網では天幕（テント）を作るものが多い。新海明の観察によると，親が放置した餌に子グモが群がっていた。【卵嚢】白色円盤状（直径 3mm），住居部のある壁面や葉上に置かれ，巣内に 4 ～ 5 個。葉上に張られた厚い天幕は防寒用と同時に産室を兼ねている。産卵期は越冬成体では 5 月頃，夏世代では 9 ～ 10 月。

【トピック】ハグモやガケジグモの仲間は篩板類と呼ばれ，前疣より前にある篩板の出糸突起から第 4 脚の毛櫛ですき出された篩板糸という糸で虫を捕る。篩板糸は粘球ではないが，非常に細かい糸が束になって，パフというかたまりを作り，虫をからめとることが出来る。オニグモ類の円網の粘球と比べると，乾燥しても接着力が残り，パフを張り替えない。

ヒナハグモ（成熟：春、夏）
Dictyna foliicola Bös.& Str.1906　**ハグモ科**

♀ 約　2 mm　　♂ 約　2 mm

赤いハグモである。ネコハグモに似た斑紋もある。【網性】葉上にボロ網を張る。【卵嚢】円形錠剤形（直径 3.5mm 厚さ 1mm），6 月に 25 頭・7 頭出嚢。別のメスは 19 頭出嚢［鈴木成］。交尾後 3 日あるいは 10 時間で産卵。【生活】オスはメスを中心とした円周歩行して求愛。飼育下で 5 月 19 日・21 日に交尾。出嚢直後から親の捕獲したハエを集団捕食する。2 ケ月後も集団捕食する例があった［鈴木成］。＜♀ Photo：谷川＞

ヤマトガケジグモ（成熟：夏、秋）
Nurscia albofasciata (Strand 1907)　**ヤマトガケジグモ科**

♀ 約　7 mm　　♂ 約　6 mm

無斑型は真っ黒だが，白点対斑がある個体が多い。対の数は多様。対の数は二対から六対までである。【網性】河川敷などの荒地や線路の枕木間の石の間にボロ網を張る。中平清によると，網にかかっていた虫はハエ，ハチ，アリ，カメムシ，ヤスデ。同様の荒れた環境に造網する他のクモもいる。【卵嚢】黄白色の球形の卵嚢を作る。産卵期は 6 ～ 9 月。
＜♀ Photo：山崎＞

クロガケジグモ（成熟：春、夏、秋）
Badumna insignis (L.Koch 1872)　**ガケジグモ科**

♀ 約　10 ～ 15 mm　　♂ 約　5 ～ 10 mm

真っ黒な体に腹背には山形斑がある。【網性】軒下・壁・窓枠など人工物の隙間に管状住居を作り，そこから大きなボロ網を張り出している。【卵嚢】巣内に置かれる。幼体が親と同居している時期は 6 ～ 10 月，飼育下ではメスが 10 回脱皮し成熟［後藤岳］。メスは 3 年間に 8 個の卵嚢を作り，6 個が出嚢した。幼体数は約 50 頭［田中穂］。【備考】オーストラリアからの移入種である。
＜♀ Photo：新海＞

04

♂ Photo：伴

白い首輪斑
肩も白い
腹背後方には対になった白点がある

♀ Photo：荘司

アダンソンハエトリ
Hasarius adansoni (Audouin 1826)
ハエトリグモ科

-- %
屋内徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬
♀ 約 6 ～ 9 mm
♂ 約 5 ～ 7 mm

【観察ポイント】オスは触肢の白毛が目立つ。腹部は小さい。ハエトリグモはオスとメスが異なる性的二型の大きい種類が多いが，メスの白毛のパターンをよく見るとメスとオスは共通である。

【習性】屋内をよく徘徊している世界共通種。他の屋内性のハエトリグモも多くが世界共通種である。屋外の観察会ではほとんど発見されないため，記録率は空欄とした。西日本では外壁でもよく徘徊している。

【トピック】ハエトリグモの求愛はオスが脚をふりあげて求愛ダンスをする視覚的な行動の他に，メスの住居を訪れる触覚的な行動があり，状況に応じて変換することがジャクソンの研究（1978）により知られているが，日本では当時高校生の大利昌久により「メスは上下二重の住居を設け，雄の来訪を上の室で待つ。交尾は上の室で，卵は下の室に産み，出嚢までメスは上の室にいて保護する」と観察報告されている（1964）。また，性的二型の小さいハエトリはオスの視覚的誇示行動が目立たない［花井・川口］。

♂

♀

ミスジハエトリ　（成熟：四季）
Plexippus setipes Karsch 1879
ハエトリグモ科

♀ 約	7 ～	9 mm	
♂ 約	6 ～	7 mm	

屋内を徘徊。アダンソンの生息地では，アダンソンに追い出されて屋外にも住む。オスは額が赤く腹背中央に縦筋がある。メスは腹背中央に 3 つの縦条紋がある。
<♂ Photo：石田，♀ Photo：荘司>

♂

♀

チャスジハエトリ（成熟：春、夏、秋、冬）
Plexippus paykulli (Audouin 1827)
ハエトリグモ科

♀ 約	10 ～	12 mm	
♂ 約	7 ～	11 mm	

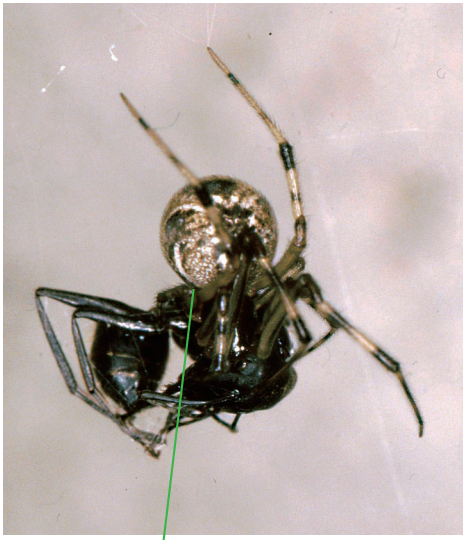
屋内を徘徊。オスは額が赤くなく、頭部前方も白くない。腹背後方に対になった白点がある。メスの背面縦筋の紋様の入り方は、オスと共通である。チャスジのメスは一見アダンソンのメスと見誤るが、縦筋パターンが異なる。チャスジハエトリの求愛・威嚇誇示行動は外国では詳しい記載がある。<♂♀ Photo：石田>

シラヒゲハエトリ（成熟：夏）
Menemerus brachygnathus (Thorell 1877)　**ハエトリグモ科**

♀ 約	8 ～	10 mm	♂ 約	6 ～	9 mm

屋内と共に屋外でもよく見られる。性的二型が小さくオスの視覚的な誇示行動は小さい。【生活】お盆生まれの幼体オスは 1 ～ 2 回脱皮して越冬し，二年目に 3 回脱皮をして 7 ～ 8 月に成熟，メスは 1 ～ 2 回脱皮して越冬，二年目に 2 ～ 3 回脱皮して越冬，三年目の夏に 1 ～ 3 回脱皮して成熟［宮下和］。【色覚】山下茂樹と立田栄光は主眼が紫外光・青色光・緑色光・黄色光の 4 種を識別していることを報告した。<♂ Photo：荘司>

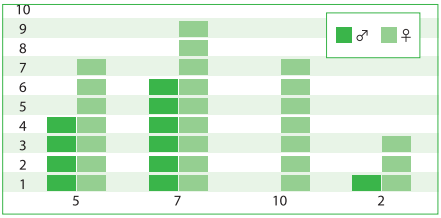
05



♀ Photo：池田

腹部は球形
色彩は多様
斑紋は類似種が多い

♂ Photo：谷川



オオヒメグモ

大姫蛛　*Parasteatoda tepidariorum* (C.L.Koch 1841)

ヒメグモ科

100 %

不規則網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 5 ～ 8 mm

♂ 約 2 ～ 4 mm

【観察ポイント】屋外でも人工物に造網していれば，オオヒメグモである場合が多い。樹間に造網する種はよく似た別種である可能性が高いので，識別には注意が必要。

【習性】屋内によく見られる。【網性】廊下の隅などに不規則網を張る。基盤に接する糸の端には微小な粘球が並ぶ。この粘球を「ガム・フット gum foot」，ガム・フットをもつ糸を「トラップ・スレッド trap thread」とよび，他の「支持糸 supporting thread」と区別する。中島晴子はヤモリがかかったのを観察している。【卵嚢】淡褐色の球形で通常 3 ～ 4 個を網の上部に作成，200 ～ 500 卵，母親は新しい卵嚢のそばにいる。

【トピック】ガム・フットに触れた虫は端から切れたトラップ・スレッドに吊りあげられる。吊り上げられた虫は投げつけ粘球でラップしてから捕食される。この投げつけ粘球の糸部分は鞭状腺から，粘球部分は葉状腺で作られる。葉状腺は集合腺の進化したものだから，ヒメグモ類が持つ投げつけ粘球はオニグモ類の網の横糸に相当する仕組みである。

カグヤヒメグモ（成熟：春、夏）
Parasteatoda culicivora (Bös.& Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

オオヒメグモよりも腹背の色彩は鮮やかであるが，オオヒメグモと見誤りやすい。正確な識別は生殖器に依る。千国（1989）の図鑑のカグヤヒメグモは別種である。糸疣の周囲に黒環があるが，黒環はヒロハヒメグモにもあるので要注意。【網性】建物の周囲ではなく公園や山麓の樹間に不規則網を造網。【卵嚢】長さ 6 ～ 9mm，幅 4 ～ 7mm の球形，オオヒメグモより淡色で，網内に通常 2 ～ 3 個吊るす。＜♀ Photo：森田＞

ツリガネヒメグモ（成熟：春、夏）
Parasteatoda angulithorax (Bös.& Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　2 ～　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

黒い腹背の中央から後方に白いギザギザの横条がある。横条線はオオツリガネヒメグモにもあるが，オオツリガネはずっと体長が大きい。【網性】不規則網の中央に砂粒を集めた釣鐘型住居を作る。同様の住居を作るヒザブトヒメグモやオオツリガネヒメグモとは，本種が小さいことから識別できる。【卵嚢】2 ～ 3mm 長の桃黄色の卵嚢を釣鐘住居内に置く。
＜♀ Photo：安藤＞

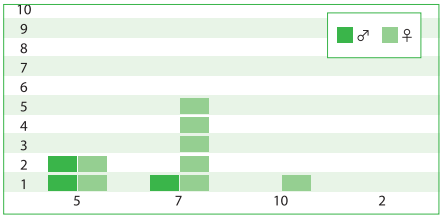
オオツリガネヒメグモ（成熟：夏）
Parasteatoda tabulate (Levi 1980)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

ツリガネヒメグモを大きくしたような紋様と形であり，腹背中央から後方に白いギザギザの横条線がはっきり見える。識別には生殖器の精査が必要。【網性】不規則網の中央にツリガネヒメグモと同様の砂粒や枝片・草を集めた釣鐘型住居を作り，下方に伸ばしたトラップ・スレッドにはガム・フットを付ける。【卵嚢】山形県で 7 ～ 8 月頃，住居中で産卵する［吉田哉］。
＜♀ Photo：谷川＞

♀ Photo：石田

卵嚢 Photo：新海



オニグモ

鬼蛛　*Araneus ventricosus* L.Koch 1878

コガネグモ科

90 %　垂直円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 20 ～ 30 mm

♂ 約 15 ～ 20 mm

【観察ポイント】体色は黒褐色で肩がとがる。色彩・斑紋に変異がある。腹背には葉状斑がある。

【習性】網は夜間張られる。【網性】50cm から 1m に達する垂直円網を張る。関西では毎日のように網をたたみ，関東では時々網をたたみ，北方と沖縄では網をたたむ習性がない［植村，下謝名］。出現時刻は日入り時刻と共に早まり，潜伏時刻は日の出時刻と共に遅くなる［岡本］。成長するにつれ造網場所は高くなる［中平］。円網がなくても脚に虫が触れると抱え込んで捕獲する。ラッピングするときとしない場合がある［小笠原］。固形のキャットフードを食べた例がある［佐藤幸］。【卵嚢】こげ茶色の円形ケーキ型。産卵期は 8 ～ 9 月，約 2 回。翌春出嚢，孵化は 8 月中で第 1 回の脱皮もすんでいる。9 月に暖かいと出嚢し，夕方卵嚢内に戻る［細野］。出嚢数平均 973 頭，標準偏差 294.9 頭［宮下和］。【天敵】オオモンクロクモバチに狩られる。寄生バエが腹部に産卵する。

【トピック】種名はラテン語の「大きな腹の」という意味。「venter」は「腹」を意味する。

ヤエンオニグモ（成熟：夏）
Araneus maccacus Uyemura 1961　**コガネグモ科**

♀ 約　20 mm　　♂ 約　15 mm

オニグモより一回り小さい。オニグモやヤマオニグモに似るが，腹部の幅と長さがほぼ等しく、腹背の葉状斑は前方が幅広く、両縁は鋸歯状ではなく波状，葉状斑は褐色のヒシ形の斑紋として目立つ。【網性】夕方から網を張り出すが，一度張った網をボロボロになるまで使った［貞元］。1m 前後の比較的低い場所に垂直円網を張る。網には隠れ帯を付ける。【備考】最初の採集地が八王子市の野猿峠。＜♀ Photo：谷川＞

ヤマオニグモ（成熟：夏）
Araneus uyemurai Yaginuma 1960　**コガネグモ科**

♀ 約　17 ～ 20 mm　　♂ 約　11 ～ 13 mm

ヤエンオニグモやオニグモとよく似ているが，腹背の葉状斑の外側の白みが強いこと、脚の輪紋の白みが強いこと、腹部がやや細長い形態をしていることが特徴である。【網性】直径 30 ～ 50cm の垂直円網を張るが，昼は網にいない。オスの方が網にいる時間が長い。網は真夜中に張りかえる。産卵前後には網を張らない［林］。【卵嚢】8 月～ 9 月に 3 回産卵の例がある。
＜♀ Photo：安藤＞

イエオニグモ（成熟：夏）
Neoscona nautica (L.Koch 1875)　**コガネグモ科**

♀ 約　8 ～ 12 mm　　♂ 約　5 mm

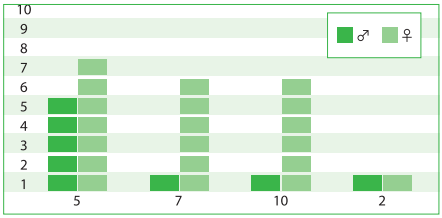
成体は 7 ～ 11 月に出現。腹部の形はコゲチャオニグモ・ヤマシロオニグモ・ヘリジロオニグモと類似。【網性】人家の軒下，駅舎の窓やホームの天井，商店等の店先や周辺，街路灯の蛍光灯の周囲などに垂直円網を張る。昼間は網の一端の建物の隅や陰に潜み，夕方から活動を始め，前日張った網を壊して張り替える。【卵嚢】白色のふわふわした卵嚢。卵嚢内越冬の幼体も多い。
＜♀ Photo：谷川＞

♀

Photo：森田

♀・まどい

Photo：池田



ユウレイグモ

幽霊蛛　*Pholcus zichyi* Kulczyński 1901

ユウレイグモ科

100 %

不規則網

成熟：春 夏 秋 冬

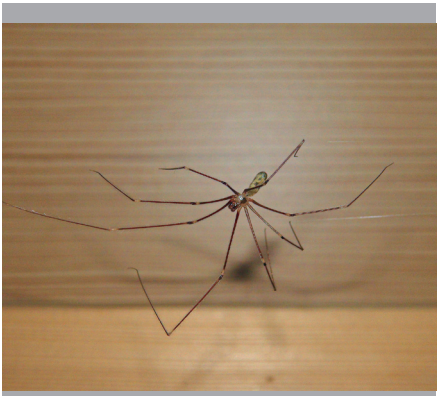
♀ 約 5 ～ 6 mm

♂ 約 4 ～ 5 mm

【観察ポイント】第 1 脚は特に長い。前中眼が退化傾向にある。平地から山地帯まで分布，丹沢では標高 550m が上限。

【習性】獲物が網にかかったり，糸に振動があったりすると，体をゆらゆらと動かすが，危険を感じるほどの刺激を受けると体がぼやけてみえなくなるほど激しく動かして 相手を威嚇する。【網性】うす暗い場所に不規則網を張る。【卵嚢】15 ～ 40 卵を糸で簡単にかがり，口にくわえて保護。産卵は 6 ～ 8 月。【生活】7 月 12 日の出嚢幼体は自然及び長日条件では 45 ～ 85 日で成熟（4 ～ 5 回脱皮，8 ～ 9 月に成体），短日条件では 90 ～ 175 日（5 回脱皮，8 月に成体）［宮下和］。

【トピック】網末端の接着部には粘球があり，虫がかかると切れる。シモングモ，イエユウレイグモも同様だった［新海明］。粘球を出す腺は不明。卵嚢のための管状腺は退化。単性域類である。単性域類はメスの貯精嚢の交尾口と受精口がひとつの型で，後に交尾したオスの精子が優先的に使われると考えられたが，実際には先に交尾したオスと後に交尾したオスの精子は混合して使われていた。



イエユウレイグモ（成熟：春、夏、秋）
Pholcus phalangioides (Fussulin 1775)　**ユウレイグモ科**

♀ 約　8 ～ 10 mm　♂ 約　7 ～ 8 mm

ユウレイグモより大きい。危険を感じると体を激しく揺らす。【網性】屋内や床下，建物周辺に不規則網を張る。網は大きいものでは70cm以上。群れを成すこともある。【卵嚢】長崎県で7月4日に51卵の記録がある［大利］。トラップ・スレッドがあるというが詳細や糸腺は明確である。粘球とは別にスクリュー・スレッドがあるという報告もある。

＜♂ Photo：新井＞

アケボノユウレイグモ（成熟：春、夏）
Spermophora akebona (Komatsu 1961)　**ユウレイグモ科**

♀ 約　2 ～ 2 mm　♂ 約　2 ～ 2 mm

微小種。シモングモによく似ているが本種は屋内に侵入することはなく，シモングモが白っぽいのに対し，本種は暗色の個体が多い。アケボノユウレイグモの生態はよく分かっていない。シモングモはフランスの分類学者の名に因むが，腹背にある対斑のうち四つが目立つ（つまり四紋に見える）ことも特徴。属名の Sperma は精液，phero は持つを意味するギリシア語。

＜♀ Photo：初芝＞

シモングモ（成熟：春、夏、秋）
Spermophora senoculata (Dyges 1836)　**ユウレイグモ科**

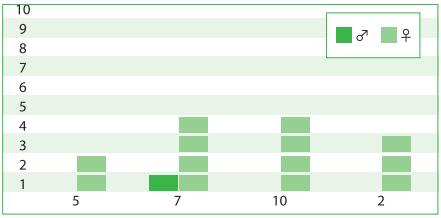
♀ 約　2 ～ 3 mm　♂ 約　2 ～ 3 mm

屋内性の微小種だが，野外にも見られる。【網性】不規則網はオオヒメグモのようなトラップ・スレッドを持つ。【卵嚢】卵を糸でかがる。産卵期は5月～11月，産卵は二度，16～27卵。1回目の脱皮まで4～7日，1～3日で分散［佐藤幸］。【生活】10月20日に出嚢幼体を飼育，自然条件及び長日条件の発育の結果は4回脱皮，2～3月に成体。短日条件では50～70日遅れて成熟（4～5月に成体）［宮下和］。＜♀ Photo：谷川＞

♀　　Photo：安藤

背甲が四角く、脚が黒い

♂　　Photo：新海



ジグモ

地蛛　　*Atypus karschii* Dönitz 1887

ジグモ科

90 %

地中性

成熟：春 **夏** 秋 冬

♀ 約 12 ～ 20 mm

♂ 約 10 ～ 15 mm

【観察ポイント】巣による同定は容易。顎が大きい。丹沢では標高 700m 以上の山地帯にも生息する。

【習性】下半分が地中にある袋巣の中に住み，袋巣の表面を歩く虫を巣の中からかみついて中に引きこむ。食べカスは外に捨てる。

【生活史】オスの成熟は梅雨期でメスの巣に同居する。7 ～ 9 月に産卵された卵嚢は袋巣の中に置かれ，やがて 9 ～ 10 月に幼体が出嚢し，2 度脱皮する。幼体は母親と同居を続け，翌春に巣を出て分散する［青木］。分散幼体のオスはその後 8 ～ 9 回脱皮し、生後 3 年目に成熟，メスは 9 ～ 11 回脱皮し，3 年目の春・秋と 4 年目の春に成熟［宮下］。空中分散前に歩行して低木間にシート状に糸をたくさん引くが，この糸は後疣からの原ブドウ状腺由来のもの。大瓶状腺由来の前疣からのしおり糸と同じものではない。

【トピック】刺激すると牙で自分の腹を刺してしまう習性からハラキリグモなどの異名をもつ。メスは成熟後も脱皮する。ジグモは糸疣が 4 節だが，糸疣が 3 節のヒラヤジグモが奄美大島等に生息する。

袋巣と卵嚢

ジグモの住居。袋巣の英名は purse web。中のクモが発育するにつれて巣長と巣幅は大きくなる。巣幅と巣内のクモの背甲幅には強い正の相関があった。また，6月中旬からは大きな巣には脱皮殻が目立つ［花井］。

＜巣及び卵嚢 Photo：池田＞

ワスレナグモ（成熟：秋）

Calommata signata Karsh 1879　**ワスレナグモ科**

♀ 約 13 ～ 18 mm　♂ 約 5 ～ 8 mm

【網性】地上部の袋巣は無い。孔の入口で外を伺い，付近を徘徊する虫を待ち構えて捕える。巣の口径とクモのサイズは相関しない［畑守］。【生活】ジグモ同様孵化から2回の脱皮を経て分散する［桑田］，空中分散の時期は6月3日～9月3日の晴れた日［関口，浜村，成田，桑田］。【備考】和名の由来はベーゼンベルグ（1906年）以降，採集されていなかったが，大正2年（1913）に岸田久吉によって「忘れぬように」と名付けられた。

＜ワスレナ♀と巣 Photo：山崎＞

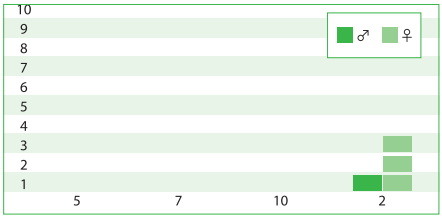
虫を顎ではさめない地中性クモ

ジグモやワスレナグモ，トタテグモなど地中に住む古いクモの仲間は，顎を左右に開閉することは出来ない。顎は上下にしか動かない。つまり，虫をはさんで捕獲することが出来ないのである。また，ジグモを除くと，糸を使った虫捕獲もしていない。糸は巣作りや卵の保護に使われている。

♀　　Photo：新井

腹背に 4，5 本の白い横縞
中窩が U 字形

扉　　Photo：谷川



キシノウエトタテグモ

岸上戸建蛛　*Latouchia typica* (Kishida 1913)

トタテグモ科

60 %

地中性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 12 ～ 20 mm

♂ 約 10 ～ 15 mm

【観察ポイント】紫色の腹背に白い横縞がある。片開きの扉をもつ。

【習性】神社や寺の境内，家の土台石の脇，植え込みの地面に縦穴の管状住居を作る。クモはこの扉のすぐ内側にいて，扉の前を昆虫，ワラジムシなどの小動物が通ると，とびだしていって捕らえ，一瞬のうちに住居の中に引きこむ。【生活】9 ～ 10 月にかけてメスの住居に移動する途中のオスを発見する。クモタケに寄生される（6 月の梅雨期に発生）。生活史が判明しているため観察会では発育段階未確認の場合が多い。都下で①オスの出巣・交尾時期は 9 月上旬ー 11 月中旬，産卵期は翌年の 7 月中下旬，産卵メスの割合は 20% を占める。7 月下旬ー 8 月中旬に孵化した幼体は母親の巣内に留まり，翌春の 4 月上中旬に出巣・分散する。②経産メス・大型メスの産卵率は 50% であることが判明した。③母親と同居する 2 令幼体は平均 74 頭［鈴木成］。野外では分散後 3 ～ 4 年で成熟する［中西］。

【トピック】最初に岸上鎌吉により採集されたのは東京大学の医学部前の植え込みであった。発見から 100 年後の 1989 年 6 月 17 日にも同じ場所に生息していた。

扉

キノボリトタテグモ（成熟：夏）
Conothele fragaria (Dönitz 1887)
トタテグモ科

♀ 約 10 ～ 12 mm
♂ 約 8 ～ 10 mm

【網性】網はない。マツ，スギ，ヒノキなどの木の表面をけずって長さ 2 ～ 3cm ほどの袋状住居を作り，入口に扉。住居と扉は樹皮や苔，土などを付着させて偽装する。【卵嚢】30 ～ 130 卵［中平］，産卵期は 8 ～ 10 月。
＜♂及び扉 Photo：新井＞

扉

カネコトタテグモ（成熟：春、夏）
Antrodiaetus roretzi (L.Koch 1878)
カネコトタテグモ科

♀ 約 12 ～ 15 mm
♂ 約 10 ～ 13 mm

【網性】網はない。地中巣に観音開きの扉を持つ。丹沢では 700 m以上の山地帯にも生息する。【生活】オスは 3 月下旬ないし 4 月 21 日から夜間徘徊。4 月 30 日オスは第 1 脚で地表を叩き，メス住居の扉を開いて侵入，約 2 分間巣内にいて後ずさりし外へ出た［牧］。8 月 28 日孵化卵が約 40［笹岡］。飼育下で産卵（8 月 12 日）と親の卵嚢捕食（8 月 27 日）を観察［牧］。＜♀ Photo：腰高，扉：谷川＞

キムラグモ（成熟：夏、秋）
Heptathela kimurai Kishida 1923　**ハラフシグモ科**

♀ 約 9 ～ 13 mm　♂ 約 9 ～ 13 mm

腹部に体節痕をもつ生きた化石。種名は発見者の木村有香に因む。この仲間は南は西表島から北は福岡県まで生息。空中分散せず移動力が小さいため地域的に種分化している。【網性】網はない。地中に穴を掘って住むが，糸は住居扉と卵の保護に使われていて巣の裏打ちはされていない。【備考】本種は本州には産しないが，クモの進化を考察するうえでもっとも重要な種なので，写真を掲げた。＜♀ Photo：谷川＞

BOX1

日本に上陸した有毒なクモ

【観察ポイント】ゴケグモ属は腹部腹面に赤い砂時計形の模様を持つ。背甲に赤い模様をもつ類似種が多いが，砂時計模様がない場合にはゴケグモではない。<解説図：池田>

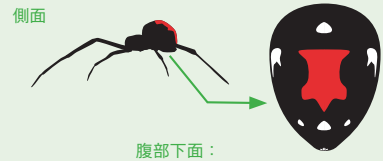
【習性】側溝や墓地など人工物に生息する有毒蜘蛛。クモ自身からヒトにかみつくことはないが，不用意に触れると咬まれることがある。ゴケグモ属のメスは人体に害をなす神経毒を持つ。オスは小形で無毒。【網性】不規則網。【生活】一年中，成体が見つかる。オーストラリアでは 10℃以上で成長，成熟までの日数はオス 28 ～ 45 日（通常 5 齢），メス 45 ～ 74 日（7-8 齢）[最適温度 25℃の例。Forster 1984 による]。冬季の四日市での卵数は 56 ～ 293 卵，平均 164 卵 [太田]。

【トピック】1995 年 11 月に本種が大阪府で発見されて以来，西日本を中心に分布を拡大している。関東でも局地的に発見されている。脊椎動物に対するゴケグモの毒成分は α ラトロトキシンだが，1950 年以降世界中で死亡例は一例もない。半世紀前のオーストラリアでの重症例は野外トイレの便座にクモがいたのに気づかず座ってしまい，性器を咬まれてしまった場合などだった。大阪府や三重県では抗毒血清が用意されている。抗毒血清はゴケグモの種類がちがっても効果がある。ただしウマ血清なのでこれにアナフィラキシーを起こすかどうか事前のチェックを必要とする。日本での咬症被害は軽症だった。なお，ヒトのような脊椎動物と昆虫のような無脊椎動物では神経伝達物質が異なり，一般のクモは脊椎動物を麻痺させる神経毒は持っていない。

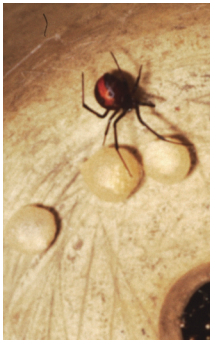
♀ Photo：高橋

セアカゴケグモ（成熟：春、夏、秋、冬）
Latrodectus hasselti Thorell 1870　**ヒメグモ科**

♀ 約 7 ～ 10 mm　♂ 約 4 ～ 6 mm



♂ Photo：新海



卵嚢 Photo：新海

ハイイロゴケグモ（成熟：春、夏、秋、冬）
Latrodectus geometricus C.L.Koch 1841　**ヒメグモ科**

♀ 約　7 ～ 10 mm　♂ 約　4 ～ 6 mm

大阪でセアカゴケグモの移入が判明した直後の 1995 年 11 月，神奈川県横浜市の本牧埠頭公園で初めて移入が確認された。熱帯から来た有毒蜘蛛。毒はセアカと同等。【卵嚢】コンペイ糖様の小突起がある。横浜の平均 147 卵［木村］。小突起はハエの寄生を減らす効果がある。【網性】不規則網【生活】世界中の熱帯地方に分布し，人工物（窓枠，建物の突起部，ベンチレーターの中，パイプの蔭，ひさしの下など）に網を張って生活する。メスは出嚢後 7 回脱皮して 9 齢で成熟するまでに 10-28 週間，平均 24 週間。オスは出嚢後 3 回脱皮して 5 齢で成熟するまでに平均 5.5 週間を要した。未交尾成体オスの寿命は 2 週間程度と短命。＜♀と卵嚢 Photo：新井＞

無毒のゴケグモ類似種

ハングツオスナキグモ（成熟：春、夏）
Steatoda cavernicola (Thorell 1890)　**ヒメグモ科**

♀ 約　6 ～ 7 mm　♂ 約　5 ～ 6 mm

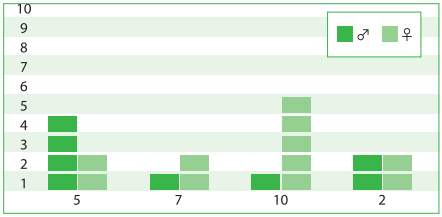
ハンゲツオスナキグモの名前は腹部前端の半月紋とオスが発音器をもつことから命名された。この仲間のクモ（カガリグモ属）は造網場所として河川敷や人工物を好むこと，ヒメグモ科であること，体色がクロゴケグモに似ていること等から，外国では毒蜘蛛と間違われることが多い。しかし，まったく無毒無害である。似た仲間にゴマダラヒメグモやシロホシヒメグモ，マダラヒメグモがいる。いずれの種も攪乱地にパイオニアとして侵入することの多い種である。
＜♀ Photo：新井＞

10

♀ Photo：安藤

腹背に碇形と波の黒紋がある

♂ Photo：谷川



カニミジングモ

蟹微塵蛛　*Phycosoma mustelinum* (Simon 1888)

ヒメグモ科

100 %

アリ専食

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 3 ～ 4 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】腹背に碇形と波形の模様がある。背甲に頸溝がある。丹沢では標高700m 以上の山地帯にも生息する。

【習性】ミジングモは微塵という名前の通り微小種や小形種で識別は難しい。しかし，カニミジングモとシモフリミジングモは斑紋の特徴が明瞭で他の種と容易に識別できる。ただし，斑紋には変異が多い。平地から山地まで広く生息する。【網性】網はない。公園，雑木林，草原，林道などの樹木の枝や葉裏，草の葉裏や茎で待機し，接近してくるアリに粘糸を投げつけて捕える。アリは空中に吊るして食べる。この投げつけ粘球はオニグモ類の横糸と粘球に相当するものである。粘球を作るのは葉状腺（集合腺が進化した糸腺），投げつけ粘球の糸は鞭状腺由来である。ミジングモはアリ専食クモである。カニミジングモは大形のアリから小形のアリまで捕獲する。

【トピック】ミジングモ類は頭を側面からみたときに眼の下にくぼみがある。アリは翅を失くしたハチに相当し，もっとも進化した昆虫である。そのアリを餌に特化したミジングモ類も進化したクモである。

シモフリミジングモ（成熟：春、夏）
Dipoena punctisparsa Yaginuma 1967　**ヒメグモ科**

♀ 約　3 ～　4 mm　♂ 約　3 mm

腹部は丸く，腹側面は黒い。両肩の間にシモフリ斑紋が凹になっている箇所がある。この凹が本種の特徴。枝間でよく見つかる。サイズに二型があり約5mmのメスもいる。【網性】網はない。アリ専食で，ケアリ属（特にトビイロケアリ）を一度に多く捕食する。梅の果樹などで採集されることが多い［梅田ほか］。

＜♂ Photo：池田＞

ボカシミジングモ（成熟：春、夏）
Yaginumena castrata (Bös.& Str. 1906)　**ヒメグモ科**

♀ 約　4 ～　5 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

ボカシミジンは全身と脚が黒い。脚が黄色で第１脚腿節に黒環ありはキベリミジングモ，黒環なしはクロミジングモ。【網性】網はない。アリ専食で，１頭のアリを捕獲していることが多い。大型と小形のケアリ（単独で餌探しをする種類）が半々［梅田ほか］。糸上で待ち伏せしていて突然，近づいたアリの前脚先を 0.1 ～ 0.3 秒かむ。アリが麻痺して動きが弱ると，次に触覚のつけ根を咬む。マダラミジングモは数回かむ［安藤］。

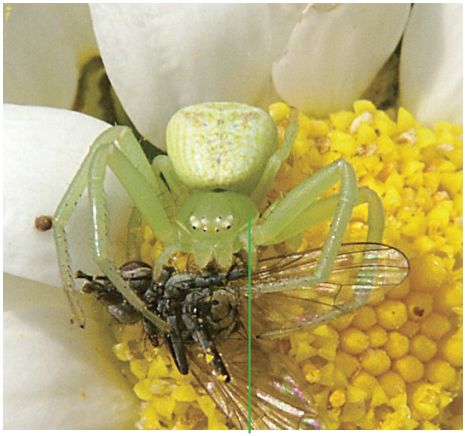
＜♀ Photo：安藤＞

コアカクロミジングモ（成熟：春、夏）
Yaginumena mutilata (Bös.& Str. 1906)　**ヒメグモ科**

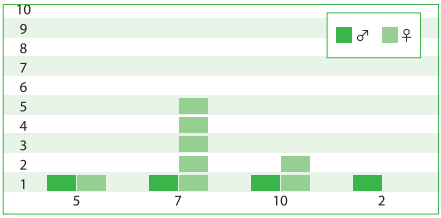
♀ 約　2 ～　3 mm　♂ 約　1 ～　2 mm

ミジングモのなかでも特に小さい種。全体的に黄褐色から褐色で赤みを帯びる。【網性】網はない。アリ専食で，夜間に葉と茎の間，葉と地面の間などに糸を引いてぶら下がり，接近してくるアリの脚をかむ。弱ったアリに粘糸を投げかけて吊り上げる［新海］。【生活】ミジングモ類の交尾や繁殖，産卵，卵嚢や卵数の記録は無い。

＜♀ Photo：安藤＞



♀　コハナグモは背甲に刺毛を持つが本種にはない　Photo：石田



♀斑紋あり　Photo：山崎

♂　Photo：石田

ハナグモ

花蛛　*Ebrechtella tricuspidata* (Fabricius 1775)

カニグモ科

100 %

葉上徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 5 ～ 7 mm

♂ 約 3 ～ 5 mm

【観察ポイント】背甲に刺毛がなく滑らかな点でコハナグモと区別できる。腹背斑紋がない個体もいる（幼体や秋に成熟するメスなどに多い）。日本での上限は標高 1500m。高山帯を除いたいたるところに見られる普通種であるが個体数は減少している。

【習性】斑紋には変異がある。葉上徘徊性で，花の上で待ち伏せ捕食をする。横歩きするものの，ほとんど動かない捕食戦術のおかげで，他の虫にとっては危険なハチや蜂に擬態したアブ，鱗粉のために取り逃がすことが多い蛾・蝶などの捕獲を主にしている。【卵嚢】100 ～ 200 卵。出嚢幼体は 2 ケ月弱で成熟するため，年中成体が出現する。6 ～ 7 月と 9 ～ 10 月に最も成体が出現，産卵もその期間に集中している。カニグモ類は卵嚢を母グモがガードする習性がある。糸腺は瓶状腺・ナシ状腺・ブドウ状腺・管状腺を備える。

【トピック】「人面蜘蛛」として話題になるのは腹背に人面様の斑紋のあるハナグモである。

コハナグモ（成熟：春、夏）
Diaea subdola O.P.-Cambridge 1885　**カニグモ科**

♀ 約　4 ～　8 mm　♂ 約　3 ～　4 mm

背甲に刺毛がある点でハナグモと区別可能。刺毛は幼体でもルーペで確認できる。成体は 6 ～ 9 月。コハナグモは 1000m を越えるとハナグモより多くなる。徘徊性（潜伏型）。ハナグモ同様の普通種だが，交尾・繁殖・産卵・卵数などの生態は記録・報告が無い。飼育による報告も無い。【備考】コハナグモと同属のクモに高標高に生息するギョウジャグモがいる。

＜♀ Photo：谷川＞

クマダハナグモ（成熟：春）
Ebelingia kumadai (Ono 1985)　**カニグモ科**

♀ 約　4 mm　♂ 約　2 ～　3 mm

色彩は褐色でヤミイロカニグモとハナグモを合わせたような色合いであるが，体長はずっと小さい。腹部の地色は黄色・黄白色・淡桃色などの変異がある。徘徊性（潜伏型）で花に潜んで待ち伏せる。交尾・繁殖・産卵・卵数などの生態報告はほとんど無い。【備考】和名は発見者の熊田憲一氏にちなむ。

＜♀ Photo：谷川＞

アマギエビスグモ（成熟：春）
Lysiteles coronatus Grube 1861　**カニグモ科**

♀ 約　2 ～　4 mm　♂ 約　3 mm

小型種である。腹背斑紋で識別するが，タカネエビスグモ，チクニエビスグモなど類似種が多い。メスは背甲の両側にある幅の広い黒色斑が目立つ。山地に多く生息。バルーニングの能力が高く，700m 以上の山地帯で多く発見される。徘徊性（潜伏型）。【備考】和名のアマギは伊豆半島の天城山にちなむ。

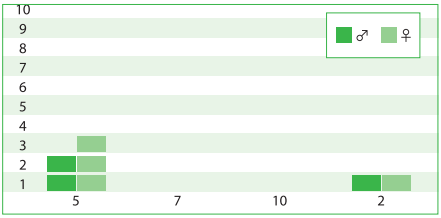
＜♀ Photo：腰高＞

12

♀　　Photo：浅間

背甲は黒褐色、腹背は
背甲より薄い黒褐色
第４脚の環紋は明瞭

♂　　Photo：谷川



ネコグモ

猫蛛　　*Trachelas japonicus* Bös.& Str. 1906

ネコグモ科

90 %

草間枝上徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

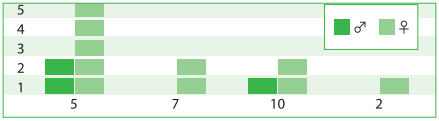
♀ 約 3 ～ 5 mm

♂ 約 3 ～ 4 mm

【観察ポイント】全体褐色だが，腹背のキ字状の黒色斑紋に特徴がある。落葉層を徘徊する。類似種にヒメグモ科のスネグロオチバヒメグモがいる。スネグロは背甲が黒くなく茶色であること，第１脚のケイ節だけが黒いことなどで識別できる。

【習性】平地から山地まで広く生息している。草間，灌木の枝上を徘徊する。越冬は幼体から成体まで。越冬巣としてオオミノガのミノをよく利用している［徳本・鍛冶秀雄］。7月 12 日長崎で，巻かれた葉の中に産卵している例があった［大利］。普通種だが、交尾・繁殖・産卵・卵数など生態報告はほとんどなく，飼育記録もない。類似の別種がいる可能性もあるため（平塚市でオスが採集されている），識別は慎重に行う。

【トピック】ネコグモは「猫」のように敏捷に走り回るという意味の命名だろう。ネコグモが所属するネコグモ科の系統は，最新のデータでは徘徊性のクモのなかで，以前所属していたウエムラグモ科よりもエビグモ科に近縁とされているが，いまなお流動的である。



スネグロオチバヒメグモ（成熟：春、秋）
Stemmops nipponicus Yaginuma 1969　**ヒメグモ科**

♀ 約　3 mm　　♂ 約　3 mm

【卵嚢】白色球形の卵嚢は 3.5 ～ 5.5mm 大で網上部の葉裏に作られる［新海］，5 ～ 8 月に 2 ～ 3 個を作成［山川・熊田］，108 卵［松本］。母グモは未受精卵を食べる［鈴木勝］。【網性】落葉中に不規則網を張る。【生活】6 月中旬に交尾を観察［稲葉］。静岡県袋井市の水田で「ゴキブリほいほい」で 6 月下旬～ 7 月上旬に採れるクモの最優占種［池田］。

＜♀ Photo：新井＞

オビジガバチグモ（成熟：夏）
Castianeira shaxianensis Gong 1983　**ネコグモ科**

♀ 約　7 ～　9 mm　　♂ 約　7 mm

第 1 脚を上下に振りながら敏捷に動く姿はアリに似ている。平地から山地に生息する。公園, 庭, 草原，河原，崖地，樹林地の周辺，林道などの草間の地表付近，石の間，石垣，堤防，落葉の中, 時には家の中などでも見られる［新海］。【卵嚢】小田原市で採集したメスは 7 月 8 日深夜に産卵。卵嚢に糸かけ終了後，飼育箱のプラスチックのフタをかじりとろうとした。11 日に 2 個目を産卵。トビムシをよく捕食［安藤］。　＜♀ Photo：谷川＞

ハタケグモ（成熟：春、夏、秋、冬）
Hahnia corticicola Bös.& Str. 1906　**ハタケグモ科**

♀ 約　2 ～　3 mm　　♂ 約　2 ～　3 mm

横並びの糸疣に特徴がある。【網性】畑地のくぼみ，草地の地表面などに，膜を張ったような 2 ～ 3cm の小さな膜状棚網を張る。クモは網の下の地表面に潜む。網には露がつくと目立つ。壊れやすい［新海］。【生活】7 月 5 日から 41 日間に 9 個の卵嚢を作成，出嚢数は 9・5・0 頭，ふ化まで平均 12 日，第 1 脱皮までは 4.5 日。翌年の 2 月 14 日に 5 回目の脱皮で成熟［佐藤幸］。

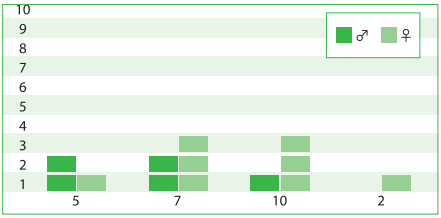
＜♂ Photo：安藤＞

13

♀ Photo：谷川

腹背の中央に 7 対以上の点斑がある

♂ Photo：新井



イタチグモ

鼬蛛	*Itatsina praticola* (Bös.& Str.1906)	90 %	成熟：春 夏 秋 冬
ウエムラグモ科		地表徘徊性	♀ 約 5 ～ 9 mm ♂ 約 5 ～ 8 mm

【観察ポイント】地表を徘徊している。体色の濃淡には変異がある。地味な紋様で覚えにくいし，タンボグモと混同された過去もあった。背甲の独特な形と腹背の点斑の紋様が決め手となる。

【習性】地表，落葉中を徘徊する代表的なクモ。獲物はトビムシ，ワラジムシ，昆虫の幼虫などで，体の堅い動物は好まない［新海］。飼育下でイタチグモは薄いシート状の網を張り，網の振動を手がかりにして虫を捕獲する［酒井春彦］。キカマキリモドキに外部寄生される。キカマキリモドキの宿主はイタチグモの他，ヤチグモ類・シボグモ・コアシダカグモなど落葉層に生活するクモ。ヒメカマキリモドキは腹柄に 1 頭だけ寄生するが，キカマキリモドキは複数寄生できる。

【トピック】記録率は 90%なのに成体はあまり採れていない。交尾や繁殖などの生態データもほとんどない。幼体でも類似種がいないので識別可能。

カムラタンボグモ（成熟：夏）
Agroeca kamurai Hayashi 1992　**ウエムラグモ科**

♀ 約　2 mm　♂ 約　2 mm

イタチグモもタンボグモも特徴のつかみにくいクモである。イタチグモのメスは脚があまり長くないためクモ自体がずんぐりに見えるし，タンボグモは脚がきゃしゃな感じである。タンボグモ類は各地に生息していると思われるが落葉徘徊性のクモなので発見されにくい。体形からワシグモと誤解される例が多いが，糸疣の形態がワシグモとは異なるので区別できる。
＜♀ Photo：安藤＞

コムラウラシマグモ（成熟：春、秋）
Otacilia komurai (Yaginuma 1952)　**ネコグモ科**

♀ 約　2 mm　♂ 約　2 mm

地表及び落葉徘徊性だが，脚が長く背面の紋様もしっかりしている。腹背には淡紫色の地に，大きな黒目模様と，頬・鼻下・顎に対に髭をはやしたような紋様がある。アリの巣穴で見つかることがよくあり［小松］，アリとなんらかの関係があると思われるが，詳しいことは分かっていない。
＜♀ Photo：安藤＞

オトヒメグモ（成熟：夏）
Orthobula crucifera (Bös.& Str. 1906)　**ネコグモ科**

♀ 約　2 mm　♂ 約　2 mm

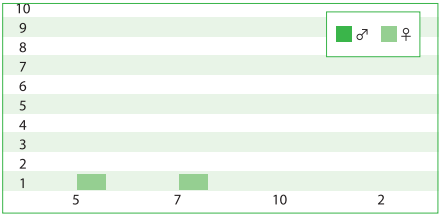
地表及び落葉徘徊性だが，腹背中央に黒い特異な斑紋があるので区別できる（図参照）。斑紋が薄い個体もある。【卵嚢】卵嚢作成後，尻から水のような粘液を出し，卵嚢表面に塗り伸ばす行動を見せた。この液体はネコグモの糊状液とは異なる。卵嚢には大粒の砂も付ける。トビムシを飽食させると，6 月 28 日から 7 月 9 日までに 2~3 日おきに 5 回産卵した［安藤私信］。【備考】ウラシマグモと近縁なので乙姫蜘蛛と命名。＜♀ Photo：安藤＞

14

♀　　Photo：新井

背甲は赤褐色
腹部中央の点斑が特徴

ヤマトフクログモ♀　　Photo：新井



ムナアカフクログモ

胸赤袋蛛　*Clubiona vigil* Karsh 1879

フクログモ科

70 %

葉上徘徊性

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 8 ～ 13 mm

♂ 約 8 ～ 13 mm

【観察ポイント】平地から山地まで広く生息する。フクログモのなかでは腹背模様に特徴があるが，ヤマトフクログモ，マダラフクログモも同様の模様である。

【習性】夜間，樹葉間や草間を徘徊，昼間は葉の上に袋状の住居を作ってひそむ。【生活】葉をまげてその中に産卵する（6～8月）。30～70卵。母親は卵嚢をガードする。
【越冬態】成体または亜成体，冬期は樹皮下に袋状住居を作る。ヤマトフクログモと共に冬季ワラ巻内の優占種。

【トピック】袋蛛という名称は袋状住居を作ることに由来する。フクログモ属は色彩・斑紋とも類似していて，識別は生殖器に依ることが必要。ムナアカフクログモとヤマトフクログモでさえも正しい識別は生殖器で行う。ハマキフクログモ，コフクログモ，ヒメフクログモ，トビイロフクログモなど河川敷や平地でも類似種がたくさん生息している。コマチグモ類はフクログモに比べると脚が長いものの，幼体では間違えやすい。

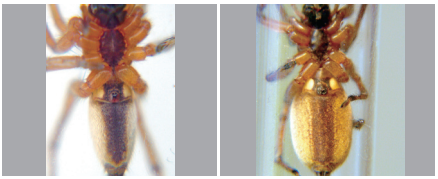
♀

ヤマトフクログモ（成熟：春）
Clubiona japonica L.Koch 1878　**フクログモ科**

♀ 約　8 ～ 13 mm　♂ 約　8 ～ 13 mm

形態や習性はムナアカフクログモとほとんど同様。ムナアカとは胸板が赤いという意味だがヤマトフクログモと区別できない。

＜Photo：新井＞（左がムナアカ，右がヤマト）



ヤハズフクログモ（成熟：春、夏）
Clubiona jucunda (Karsch 1879)　**フクログモ科**

♀ 約　6 ～ 8 mm　♂ 約　4 ～ 6 mm

腹背は黄色または黄褐色で矢はず状の暗色斑紋がある。斑紋が薄い個体や中央に赤い条がある個体も見られる。斑紋が明瞭な個体は識別が容易である。成体出現期は 5 ～ 8 月。林の周辺，林道などの枝や草上を夜間，徘徊する。冬期は樹皮下，スゲ植物の間，落葉下などに袋状住居を作り越冬する。＜♀ Photo：新井＞

ヒメフクログモ（成熟：春、秋）
Clubiona kurilensis Bös.& Str. 1906　**フクログモ科**

♀ 約　4 ～ 6 mm　♂ 約　4 ～ 6 mm

水田の周辺と河原草原に多く，細いイネ科植物の葉を巻いて住居を作りその中に潜む。関東北部の水田にはハマキフクログモより多い。【生活】5 月 14 日産卵，5 月 29 日孵化。まどいは 20 頭。6 月 4 日に卵嚢内で 1 度脱皮。6 月 6 日に出嚢・分散した。親はこの段階まで卵嚢をガードする。約 4 ケ月で成熟した。年 2 ～ 3 世代と推定［林・千国］。

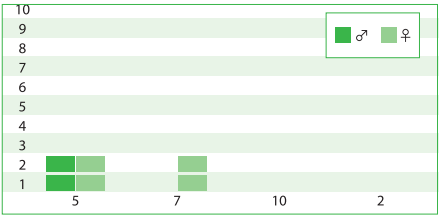
＜Photo：安藤＞

15

♂ Photo：新井

背甲中央に蝶模様が見える
腹背は黒茶色、糸疣が突出

ヨツボシワシグモ♀ Photo：新井



メキリグモ

目切蛛 *Gnaphosa kompirensis* Bos.& Str. 1906

ワシグモ科

40 %

地表徘徊性

成熟： 春 夏 秋 冬

♀ 約 6 ～ 14 mm

♂ 約 5 ～ 8 mm

【観察ポイント】ワシグモ類は黒っぽい体色で識別が難しい。メキリグモ属は背甲中央に蝶々模様が見えるが，メキリ，カワラメキリ，モリメキリ等６種は模様だけでは区別できない。生殖器の構造に依る確認が必須である。

【習性】河原，池や沼の周辺，草原，林道等の石の間，石や倒木の下，地表面，草間の地表付近，落葉の中を歩き回って獲物を探す。産卵は，主に石の下のくぼみに白色の卵嚢を作り，その上で保護する。

【トピック】「メキリ」は後牙堤歯が鋸状であることから岸田久吉が命名した。ワシグモ科は糸疣が後端に突出するのが特徴だが，クサグモやハタケグモの糸疣も同様に目立つので特に幼体では誤る可能性がある。ワシグモは糸疣の前対と後対が円筒形で、かつ前対が互いに広く離れている点が特徴。地表や落葉層から偶然に見つかる例が多い。東京蜘蛛談話会の会誌名 Kishidaia の由来となったヨツボシワシグモ *Kishidaia albimaculata* (S.Saito1934) は腹部に四つ星紋（白紋）をもつ樹上性ワシグモである。

エビチャヨリメケムリグモ（成熟：春、夏）
Drassyllus sanmenensis Platnick & Song 1986　**ワシグモ科**

♀ 約　5 ～　8 mm　♂ 約　5 ～　7 mm

全身が黒くてそのほかの特徴が不明瞭。日本産ケムリグモやヨリメケムリグモの識別は難しく斑紋では識別できない。ヨリメケムリグモはケムリグモよりも後中眼が大きい。平地から山地に広く生息する。草原，河原，樹林地の周辺，林道等の落葉の中，草間の地表付近，地表面，石や倒木の間を歩き回って獲物を探す。5 ～ 11 月に成体。幼体にアリ卵を与えると食べる［稲葉］。
＜♂ Photo：池田＞

クロチャケムリグモ（成熟：秋）
Zelotes asiaticus Bos.& Str. 1906　**ワシグモ科**

♀ 約　4 ～　8 mm　♂ 約　4 ～　6 mm

京都市にて成体は春と秋，亜成体は春に出現。春の幼体は小形，夏にかけて大きく，秋には再び小形。産卵期は 5 ～ 7 月で，17 ～ 34 日後出嚢，幼体は秋まで成長し (2 ～ 5 齢)，越冬に入る。翌春，成長を始め，夏に亜成体，秋に成熟 (8 回脱皮)，成体越冬後，春に交尾，その後産卵。2 年 1 化［加村］。神奈川県平塚市で 7 月 31 日出嚢幼体 (2 齢) は飼育下で 6 齢まで（10 月 4 日）生存［渋谷］。＜♀ Photo：新海＞

フタホシテオノグモ（成熟：夏）
Callilepis schuszteri (Herman 1879)　**ワシグモ科**

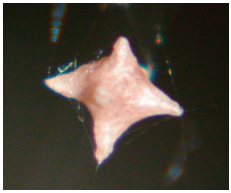
♀ 約　5 ～　7 mm　♂ 約　4 ～　5 mm

背甲と腹背前方に金色の毛をもち輝くワシグモ。腹背の斑紋が目立つ。メスがやや大きい。5 月下旬から 7 月に成体。詳しい生態は不明。外国のテオノグモの一種ではアリを狩る様子が詳しく報告されている。正面から第 1 脚を振り上げて向かい，アリの触覚の根元に脚を差し込んで進み，触覚の根元を咬む。
＜♀ Photo：新井＞

16

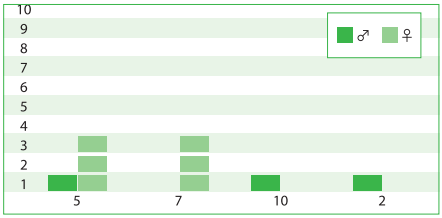
♀ Photo：新井

餌捕食 Photo：森田



卵嚢 Photo：新井

網の中央にいる
やや黄色い



ヤマジグモ

山路蛛　*Ogulnius pullus* Bos.& Str. 1906

カラカラグモ科

60 %

立体円網

成熟：春 夏 秋 冬

♀ 約 1.0 ～ 1.5 mm

♂ 約 1.0 ～ 1.5 mm

【観察ポイント】 野外では網または卵嚢でやっとみわけられるほどクモは小さい。クモは網の中央にいる。

【習性】 体長 1.0 ～ 1.5mm の極小種である。【網性】湿気の多い暗い林内の地表近くの草間に水平円網がくずれたような立体円網を張る。この立体円網は円網の変形とみなせる。網は縦糸 8 本, 横糸 4 本で, 枠糸はない。網の中央から四方へ放射状でこしきは無い。餌捕獲行動は縦糸を「宙吊り状態」でゆっくり進み，接点で横糸をつたい，餌に乗りかかって包んだ。糸に餌をつけたままで，糸を切断したり，引き伸ばしたりしながら網の中央方向へ運んだ。行動はナルコグモとの類縁を示す [新海明]。平地での出現率は低いが，クモが小さいために見落としが多いように思われる。【卵嚢】7 ～ 8 月に白色の 4 角形の卵のうを作る。2 ～ 3 ケ月で成体になるので 1 年に 2 世代以上の可能性がある [新海]。

【トピック】 和名のヤマジは「山路」の意味である。属名はローマ人の名前，種小名の意味は「芽，雛」を意味する。

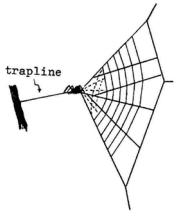
カラカラグモ（成熟：春、夏）
Theridiosoma epeiroides Bos.& Str. 1906　**カラカラグモ科**

♀ 約　2 mm　♂ 約　2 mm

クモは微小。【網性】網は林道や渓流沿いの石や岩の間，草原の下部，湿った崖地などに張られる。垂直円網，水平円網，円錐形垂直円網の 3 種類の網を張る。垂直円網，水平円網は主に幼体期の網で，成体は直径 5 ～ 10cm の垂直円網を張って，中心より直角または斜めに引いた糸をたぐって造られた円錐形垂直円網を張る。網の形が傘に似ていて「傘状円網」と呼ぶ。造網法は典型的な円網だが，最後にこしきの部分がかみ切られて，無こしき網となる［新海・新海明］。＜♀ Photo：谷川＞

カラカラグモ【卵嚢】

コケの間や下草の間など湿った環境にカラカラグモの卵嚢が目立つ。発生・発育の研究はない。
＜卵嚢（上）：谷川，幼体は水平円網を張る（下）：新海＞



カラカラグモの
円錐形の網の図

＜鳴子網の図（新海 1997 より描く）＞

鳴子網

水面上に垂糸を下す鳴子網を張る**ナルコグモ**
Wendilgarda nipponica Shinkai 2009（♀ 2mm, ♂ 1 ～ 2mm）
もカラカラグモ科である。クモはごく小さい。
＜ナルコグモ photo：新海＞

コラム 1

雌雄成体の見分け方

オスは成熟すると，膨らんだ触肢の先が発達して交尾器が現れてくる。したがって，オス成体は一見して区別できる。膨らんでいても割れていなければまだ成熟前である。この交尾器にはスポイトのゴム球のような血嚢と注射針に当たる移精針があって，メスの生殖孔に精子を送り込むことが出来る。
<写真１：血嚢が膨らんでいる>

一方，精子を受け取るメスの生殖孔は腹部腹面にあり，外雌器と呼ばれている<写真２>。外雌器を確認するためには，採集したクモを裏返す必要があるが，クモは反転させられた状態では静止していないため，確認は面倒である。成熟する直前の齢の亜成体では構造はあるが孔が開いていない。通常，孔が開くだけでなく暗色になったりして明瞭になる。ハエトリグモなどではメスの触肢が膨らんでいるように見える種類が多く，雌雄の判定に迷う場合がある。それでもハエトリグモは雌雄が色彩の異なる二型を示すので区別可能だが<写真３>、二型が小さいシラヒゲハエトリのような種類もいるし，オスが亜成体まではメス型を示すハエトリも多い。触肢が膨らんでいない，外雌器もできていないという場合には成熟前の幼体。

写真１：ネコハエトリ♂触肢　Photo：荘司

写真２：ナカヒラハエトリ♀外雌器　Photo：荘司

写真３：ヨダンハエトリ♀

♂

幼体　Photo：荘司